

氏 名	権 五信 (ケン オツ)		
学 位 の 種 類	博 士 (芸 術)		
学 位 記 番 号	甲第 28 号		
学 位 授 与 日	平成 22 年 3 月 23 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
論 文 題 目	記憶のイメージによる時間の再構成		
審 査 委 員	主査 教 授	本 江 邦 夫	
	副査 教 授	西 嶋 憲 生	
	副査 教 授	渡 辺 達 正	
	副査 東京国立近代美術館		
	美術課 主任研究員	都 築 千重子	

内 容 の 要 旨

私は、静止している記憶の時間を取り出し、流れている現在の時間と混ぜ合わせ、また、以前とは異なる空間での時間を作り上げている。その時間は、過去の時間でもなく、現在の時間でもない、新たな時間であり、それは、私の未来の時間であるかもしれない。人間の時間、あるいは人間によって生きられた時間は、時計で測れるような、機械的なものではない。こうした人間的な時間をアンリ・ベルクソンは〈持続〉としてとらえた。彼の考えからは、時間とは過去と現在が断絶され流れていることではなく、過去と現在がともに流れていく運動自体を意味していると考えられる。そして、このような時間は、絶え間なく連続している現在の経験により、徐々に私たちの記憶だけで存在することになる。ということで、時間性と記憶概念の関係について考える。

記憶で存在している過去の時間の経験は、回想を通じてその姿を現す。

記憶は、私たちの意志でコントロールできることではなく、私たちも知らないあの瞬間にふとその姿を現すことである。したがって、以下では、記憶についての回想を写真と結びつけ考えてみる。

写真が過去の状況をそのまま、再現しているから過去の時間を回想するとき写真に依存する。そして、私たちはその写真を通じて曖昧になった記憶に刺激を与え、過去の時間を回想する。しかし、写真が記録しているのは、その写真に映っている状況だけであるが、私たちは、写真を見ているとき回想されるすべてのことが、その写真のイメージとともに経験したことだと思い込んでしまう。そこで、写真を通じて現れ

る記憶の回想について考えることにする。

記憶や夢のような極めて個人的なことは、イメージで表現しなければ、第三者に正確に伝えることは難しいものである。それゆえ、イメージについても改めて考察する必要があると考える。特に、私の記憶を風景のイメージで表現し、その場所が持っている意味とそのイメージから生じる錯覚について考える。私の作品に表れているイメージは田舎の風景であり、私にとって、その場所は、特に様々な思い出が籠っている。そして、私は、私の記憶として田舎の風景に、家で味わう感情と同じものを感じ取るのである。

ここで、私は場所におけるアイデンティティについても考察する必要があると考える。それは、特定の場所での経験が人の人生に対して、様々な影響を及ぼすことは確かであるからである。

現在、私の作品に表現しているイメージは、特定の場所になっている。一方で、以前の作品では、私が何度も往来した都市部の場所のイメージで表現している。その作品から経験する錯覚、つまりデジャヴについて考えてみる。デジャヴは、特定の人だけが感じる現象ではなく、普通に誰にでも起こる時間に関する錯誤現象であり、それをある状況に対して記憶を回想する過程の中で発生する一つの錯覚現象と関連させて考えてみる。

記憶のような個人的な内面世界、あるいは無意識な世界を現代美術家はどのように表現しているかについて、作家のコンセプトから読み解く記憶の表現とコンセプトとしての記憶の表現という二つの観点を持ちながら考察する。そして、私の作品で記憶がどのように解釈され、新たな時間を作っているのかをより詳しく述べる。

記憶のイメージで表現している私の作品はすべてリトグラフで成り立っている。

私は、リトグラフの様々な手法のなかで、トナーが持っている特性を生かしながら作品を制作している。トナーの効果は、私にとって、単なる偶然性の表現をもたらすだけではなく、記憶が持っている特性と結びつけて考える。そして、時間差を防ぐため、版に直接ドローイングする意味について考える。

このような制作過程を経て完成した作品は一つの時間として存在すると同時に、また別の時間を作り上げる。それは、完成した版に、再びニードルや紙やすりを利用し、イメージを削ったり、描いたりすることによって、新たな時間が生まれるのである。そして、コラージュという技法で新たな時間を作っていく。コラージュ手法は、私にとって新たなジャンルへの挑戦である。私の完成したすべての作品は、スライドパズルの形式で設置される。それは、一つの作品が様々な作品のイメージと組み合わせることができることである。

今までは、記憶について様々な観点から探ってきたが、記憶を一つの言葉で定義することは難しいことである。しかし、記憶は私たちにとって、今まで生きてきた自分の痕跡であると同時に私自身の歴史であるから大事にする必要があると考えられる。

そして、記憶はあくまで個人的な体験から始まっているため、それを認識し、再発見することは、すべて本人だけ可能なことかもしれない。しかし、このようなもっとも主観的な記憶に深い関心を持つ理由は、記憶に注目することによって、私たちの生活がより豊かになり、それによって、楽しみが倍増すると考えるからである。さらに、今回の研究を通じて、漠然とした記憶が徐々に整理しつつ、今後からは、コンセプトや作品として以前より豊かな表現ができ、作品に対する視野が広がり、様々なことを再認識しながら、制作に向き合うことができると考えられるのである。